
彼女の秘密

Mu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の秘密

【Zコード】

N8972D

【作者名】

Mu

【あらすじ】

僕は、彼女に告白し、ふたりは両想いだと思った。なのに、どうして彼女は、僕をさけるんだ？彼女の秘密を知ったとき、僕は……
高校生のちょっとエッチな、でも、純愛物語。春工口ス2008参考作品です。

僕はドキドキして立っていた。

目の前に女の子が小首を傾げながら、僕を見つめている。

それは、僕のあこがれの女の子だ。

腰まで届く、長い艶やかな髪。くつきりした目元。細くてかわいい眉。

つんとした綺麗な鼻筋と卵形の綺麗な輪郭。そして、透き通るような白い肌。

背はわりと高く、ほっそりとしているのにプロポーションはよくて、まるでどこかのお嬢様のよつた清楚な容姿をしている。

その少女は、僕の同級生で、同じ水泳部の仲間だ。

今、僕は、その少女に、告白しようとしていた。

高校入学から、早四ヶ月。もうすぐ夏休みが始まる。

その前に、自分の気持ちを彼女に伝えたかった。彼女を好きな気持ちを伝えたかった。

そして、できれば、恋人になれたらいいなあと……。

高校入学で僕らは同じクラスになった。

僕は、一目で彼女のことが気になった。

綺麗でかわいくて、そこにいるだけで花が咲いているよつにみえた。

控えめで、普段は言動で目だつたりしないけれど、誰かとおしゃべりしながら、笑っている表情は、僕の胸にドキドキする気持ちをもたらした。

驚いたことに、そんな彼女と同じクラブに入っていた。それは、全くの偶然。

僕が水泳部に入部したときには、彼女もいたんだ。

その偶然が、どんなに嬉しかったか。

僕らは、いつの間にかよく話すようになった。

話題は、クラブのこととか、勉強のこととか、友達のこととか、

そんなたわいもないこと。

そんなとき、僕の冗談に口元をほこりばせて楽しそうに笑う彼女

を見ていて、僕は、はつきりと、自分の気持ちに気づいた。

彼女のことが好きだ。もっと、彼女と一緒にいたい。

だから、僕は彼女を呼びだした。

クラブが終わった後の、プール場の裏手。

「話があるんだけど……」

僕の言葉に、彼女は、素直についてくれた。

そして僕は、目の前の彼女を見つめながら、ドキドキする胸の鼓動を押さえて話し出した。

「あの……」

「うん、なに?」

彼女が小首を傾げる。その仕草が、たまらなくかわいい。

あ、いや、今は、それより……

「えっと、聞いて。僕は、その、君のことが……」

「わたし?」

僕は、思い切って告げた。

「好きです。とっても、好きです」

なにも2度も言わなくても、と自分で思つ。とっても恥ずかしい。

その言葉に、彼女は、しばらへキョトンとした顔をしていた。

僕の胸が痛くなつてくる。

彼女は、僕のことどう思つてゐるんだろう? たぶん、嫌われてないとは思つけど。

でも、何とも思つてないとか? それはあるかも?

ああ、そしたら、ダメかな? 告白しない方がよかつたかな? でも、でも……。

なんだかどんどん弱気になってきた。彼女の沈黙が胸にいたい。もう、どうでもいいから、早くなんか、言ってくれよ。そんなふうに思った。

それは、そんな長い時間でなかつたかもしれない、でも、僕にはじりじりするほどの時間だった。

彼女は、驚いた表情をおさめると、僕に言った。

「ほんとに？ ほんとに、わたしのことを好きになつてくれたの？ その表情が、少し照れたように赤く染まつてくる。

「うん。 そうだよ」

「う、嬉しい！」

目の前で、彼女が両手を頬に当ててそう言った。

嬉しい？ それって、僕が好きでよかつたと言つこと？

彼女も、僕のこと好きでいてくれた？

僕は期待で胸が震えた。

「君も、僕を好きでいてくれたの？」

彼女は、はにかんだ表情で、

「……うん」

と小さく答えてくれた。

やつたあ！

僕は天にも昇る気持ちになつた。

両思いだつた！ 彼女と！ やつた！

小さくガツツポーズまでしてしまつ。それから僕は早口で言った。

「じゃあ、あの、付き合つてくれる？」

当然、はいと言つてくれたと思つた。だって、好き合つてるんだから。

でも、その時急に、彼女は、ハツとしたような表情をして、その

顔が曇つた。そして、

「あ、あの……」「」「めんなさい」

「え？」「

「わたし、あなたと付き合えない」

何を言われてるのか、理解できなかつた。だつて、さつき、好きだつて……。

「ほんとこ、じー、じー、めんなさい」

彼女は、ちよつと頭を下げる、逃げるよつに僕の前から走り去つた。

「あつ！」

僕は追いかけることもできなかつた。

何がなんだかわからなくて、それさえも考えられなかつたんだ。

いつたい、どうこいつなんだう？

彼女は、確かに、僕のこと好きだと言つてくれた。

それなのに、付き合おうと言つたとたん、逃げるよつに帰つてしまつた。

なにか、気にさわることでも言つてしまつたのか？ 僕の態度が氣にくわなかつたのか？

なんだかわからないけれど、彼女を怒らせてしまつたのなら、謝ろう。謝つて、もう一度、彼女に僕の気持ちを聞いてもらおう。

そう思つて、翌日学校に行つた。

教室で彼女を見つけて、話しかけようとした。

ところが、僕が近づくより前に、彼女は、すつと、席を立つてどこかにいつてしまつ。

ああ、仕方ない。また、後で話しかけよう。

そう思つた。

ところが、そんなことが、何回も続いた。

これは……避けられてる。やっぱり、嫌われたのかな？ なんだか、落ち込んできた。

ううん。でも、とにかく聞いてもらわなきゃ。僕はそう思つた。

でも、彼女には完璧に避けられていて、教室でも、機会があるだろ？と期待したクラブでも、彼女をつかまえることは出来なかつた。

そんなことが、何日も続いた。

相変わらず、僕は彼女に避けられていた。

最初は、そんなにひどく嫌われたんだと落ち込んだ。

でも、時々、僕が見ていないときに、彼女が僕を見ていることに気づいた。

僕が偶然振り返つて彼女を見たときなど、彼女は慌ててそっぽを向くのだ。

その頬がなんだかちょっと赤く染まつて見えた。

それは、僕が嫌いだからという態度には、見えなかつた。じゃあ、どうして、避けられてるんだろう？

僕は、あらためてそう思つた。

もし、彼女があの時言つたように、僕のことを好きでいてくれるのなら、なぜ、付き合えないって言つんだろう？
たとえば……。

僕の他にも好きな人がいて、一戻かけるのがイヤだとか？……

いや、彼女が、そんなことするとは思えない。

それなら、無理矢理、誰かの彼女にさせられていて、それで僕と付き合えないとか？ 齧されたりしてるとかもしれない。

僕の想像は、だんだん過激になつていく。

もしかしたら、彼女の家に借金があつて、それで、やばいところで働かされていて、それを知られるのがイヤだからとか？ 放課後はいつも身柄を拘束されてるとか？

そんな、あぶない小説だかドラマのよつなことまで考えてしまつ。でも、そんなことを考えながら、一つだけわかつたことがあつた。もし、彼女がなにかの理由で、困つてているのなら、僕がなんとかしてあげたい。

彼女が僕のことを好きでも好きじゃなくても、僕は、彼女が好き

なんだから、彼女の心配を無くしてあげたい。
僕はそう心に決めた。

明日から夏休みといつ一学期の終業式の日。
僕は、相変わらず避けられている彼女に、なんとか先回りしようとした。

ホームルームが終わると同時にそそくさと飛び出した彼女の後を、
周囲も省みずに、追いかけた。

廊下を突っ切り階段を飛び降りて、下駄箱の前で、走るように逃
げ去る彼女の腕を掴んだ。

彼女が驚いたように振り返る。その頬が少し赤い。

「どうしても、君と話がしたい！ お願い、逃げないで！」

僕は彼女の腕を掴みながら、頭を下げた。彼女の腕の震えが伝わ
つてくる。

「……どうして？」

久しぶりに聞く、彼女の声。僕の胸が熱くなつた。

顔をあげてみた彼女の表情は、困惑に彩られている。でも、僕は
言つた。

「君が僕を避けてるのは、わかってる。僕のことを嫌いになつたの
かもしねりない。でも、お願ひだから、理由を教えてくれ！ 賴むよ
！」

彼女の視線が揺れて、表情が苦しそうに変わる。

「……ち、違うの。あなたを嫌いになつたわけじゃないよ

「じゃあ、なんで？ もし、他にもっと好きなやつがいるんなら、
はつきり言つて。僕はあきらめる

「違う。違う」

彼女が首を激しく振つた。

「それとも、誰かに脅されてる？ なんか、困った事情がある？

それなら、僕は、君を守りたい。だから、教えてくれ！」

彼女は、僕のそんな捨て身の言葉を聞いて、じばりく震えながら俯いていた。

それから、顔をあげると、静かな声で僕に言った。

「……付いてくれる?」

「え?」

「ふたりだけのところで、話したい」

「……うん」

そうして、僕らは、屋上に向かった。

終業式の午後の屋上には誰もいなかった。
夏の空が、青くひいろがって、白い雲が気持ちよさそうに浮かんで
いる。

校庭で活動する運動部の掛け声が、小さく聞こえていた。

彼女は、屋上を先に進んでいくと、金網の柵の手前で立ち止まつて、僕の方を振り返つた。

その表情が思い詰めたようだ見えた。

僕はさうこ近づこうとして、

「そこで、止まつて」

という彼女の言葉で立ち止まつた。

彼女まで、まだ2メートルぐらい離れている。大切な話をするには、ちよつと遠い気がした。

「ここで？」

「うん。そこで」

でも、彼女にそう言われたら、動けなかつた。

彼女は、なんだか震えているみたいで、見ていて苦しくなつてくる。

「あの……大丈夫？」

「う、うん。大丈夫」

とても、そつは見えなかつた。

こんなに苦しむのに、無理に言わせることはないのかな？

そんな気がしてくる。

彼女をこんな苦しむのなら、僕が我慢すればいいことだ。これじゃ、本末転倒だ。

「あの、もう……」

言わなくて、いいよ。と言おうとしたとき、彼女が言つた。

「お願い、聞いて。わたしのことを、見て」

そう言つて、彼女が僕を見つめた。その瞳がはつきりと決意を告げている。

「わたしのほんとうのことを、教えるわ。わたしが、あなたと付き合えない理由。だから、見て」

彼女の言い方が少し引っかかる。

ほんとうのことを、 “見”て？ 何を、見るんだ？

そう思う僕の前で、彼女が両手で自分のスカートの裾を掴んだ。綺麗な腿が覗くミニのスカート。その裾を、彼女がそろそろと引き上げていく。

「え？」

なにを？ と思った。なにをしてるんだ、彼女は？

そんな事したら、スカートの中が見えちゃうじゃないか？ 子供のスカートめぐりじゃないんだから……。

僕は、ドキドキして、目を逸らした。

でも、彼女の顔を見ると、恥ずかしいからか、僕から視線を外し、真つ赤な頬をしながら、それでも唇をかみしめている。

その表情が、僕によつぽどの覚悟だとわからせる。

そんなに彼女が覚悟してゐのなら、ちゃんと見なきや。僕は再びそろそろとあがつていくスカートの中を見た。

なんだろう？ なにがあるんだろう？

もしかして、事故とかで、大きな傷跡があるのかな？

それとも、火傷の痕がひどいとか？

もつと単純に大きな痣があつて、それが恥ずかしいからとか？ えつと、なんだろう？

次第に露わになっていく彼女の太腿の奥に、僕はドキドキしながら、でも目を逸らさずにいた。

白い腿が眼にいたい。

もうすぐ、パンティーが見えちゃうんじゃないかと思つて、さす

がに目を逸らしたくなつた。

でも、その時……逆に、視線を逸らせなくなつた。

僕の視線の先に、彼女の綺麗な下腹が見えていた。白い腿の上、股の間には、黒い茂みが露わになつていて。

彼女は……パンティーを着けていなかつた。

え？ え？ なんだ？ どうして、彼女が、こんな？

頭が混乱して、思わず口から、言葉がでた。

「どうして、はいてないんだ？」

彼女が、ビクッと体を震わした。

あ、しまつた。そんなこと、口に出すんじゃない。

彼女の顔は、ビックリするほど赤く染まつていて。きつと、死ぬほど恥ずかしいんだ。

それで、思い当たる。

きつと誰かにやらされてるんだ！

彼女に、こんな、恥ずかしいことをさせるなんて、いつたい誰だ？！

怒りの感情が湧きだした。

「もういい！ もういいから、スカート下げて！ 君に、こんな事をさせるやつ、僕が許さない！」

僕がそう言つと、彼女は、視線を僕に向けて、真っ赤に染まつた顔で言つた。

「ううん。そうじゃないの。そうじゃない！」

「え？」

彼女の答えがわからなかつた。

そうじゃないつて、どういうことだ？

その間も、彼女はスカートを降ろそとしない。彼女のあそこが

僕には丸見えだつた。

「違うの。誰かにやらされてるわけじゃないの」

「でも、そんなに恥ずかしそうで……」

「うん。そうなの。恥ずかしい。恥ずかしいけど、わたし……これ

が、好きなの」

震える声で、彼女はそう言つた。

僕は、呆気にとられて声も出なかつた。

これが好き？ 恥ずかしいけれど。恥ずかしいから？ 好き？ それつて……

「そう。 そうなの。わたし、露出好きなの。こんな格好で、学校にきてるの。こんな格好が、気持ち良いの。だから……」

彼女の体が小刻みに揺れていた。顔が上氣して、息が苦しそうだつた。

「……あなたと付き合つことなんか出来ない。こんなわたし、あなたは嫌いになっちゃう！ こんな、変態なわたし……」

そこまで言つて、彼女がいきなりがくつと膝を折つた。そのまま倒れそうに傾いた。

僕は慌てて彼女に駆け寄る。

無我夢中で彼女の背中に腕をまわした。

そのままなんとか座り込んで倒れる彼女を受け止める。

僕の両腕の中に、彼女の柔らかい体が横たわつた。

「あっ、あうっ、ううん」

腕の中で彼女が何度も動いた。まるで小さく痙攣しているみたいだつた。

彼女のスカートが捲れ上がつたままになつていて、彼女の茂みと白いその部分が、間近に見えた。

うわあ、と思って、慌てて手でスカートの裾を下ろした。腕の中でようやく彼女が眼を開けた。

真つ赤な顔はそのままで、ハア、ハア、と息をする度に、腕の中で彼女の胸が上下した。

「えっと、あの……だ、大丈夫？」

僕の言葉に、彼女は一瞬僕を見て、それから顔を横向けた。そし

て言ひ。

「あ、ありがとう。抱えてくれて。でも……わたしのこと、嫌いになっちゃったよね。こんなわたしのこと……」

僕は、なんていつたらいいのかわからなかつた。

あまり突然のことに、頭が回らない。

「わたし、わたし、イッちゃつた。あなたに見られて、イッちゃつたの。は、恥ずかしい……」

彼女は頬に手を当てて顔を隠した。

「こ、こんな恥ずかしい子、こんな、変態、イヤだよね？」

そう言つて、肩をふるわせた。

僕は、彼女の体を抱えながら、思つた。

あんまり突然で、あんまり驚きで、すぐにはよくわからなかつたけど、これつて、僕が思つていたことと比べて、どうなんだろ？

彼女は、僕以外の誰かを好きだつたわけじゃなかつた。

誰かに無理矢理脅されてるわけでもなかつた。

まして、借金の形で困つてるわけでもない。

それに、なにより、彼女は、僕のことを好きだと言つてくれている。

それ以上に、大切なことがあるか？

そりやあ、彼女のこと、ちょっと驚いたけど……今も、驚いてるけど、でも、僕は……。

僕は顔を覆つて腕の中で震えている彼女に声を掛けた。

「あのせ、僕は、君が好きだよ」

「え？」

彼つていた手をはずして、彼女が僕を見た。その瞳に光るもののが浮かんでいる。

「でも、でも、もう……」

「ううん。嫌いになんかなつてない。君のことが、好き」

「でも、だつて、わたし、こんななのに……」

「関係ないよ。そりゃあ、ちょっと、ビックリしたけど」

「いいの？ こんなわたしで、いいの？」

「もちろんだよ。それに……」

僕は、ちょっと恥ずかしくなる。

「好きな女の子がエッチなのを、男がイヤなわけないじゃないか！」

僕の頬が恥ずかしさで熱くなつた。彼女の瞳から涙の雫が落ちる。

「……嬉しい！」

彼女は突然僕の背中に腕をまわし、僕を引っ張つた。

僕の唇が彼女のそれでふさがれる。

それは僕の初めてのキス。女の子とのファーストキス。それが、こんなに甘いものなんて、僕は初めて知つた。

*

そのあとでの、彼女との露出の数々や、初体験は、またいつか話そ
う。

僕らはふたりとも、あの「ひみつ」と好きになつた。身も心も
一緒になつたんだ。

ねえ、君、愛してるよ。

これからもずっと、『キラキラ』しそうな

おわり

後編（後書き）

春工ロス2008企画で

『18禁ぎりぎりのHロスを…』

ということでしたが……すみません、力不足です。
でも、わたしには、これがぎりぎり（笑）

春工ロス企画終了しました。

読んでいただいた方、投票していただいた方、ありがとうございました。

続編を書きました。

『彼女の秘密2』です

よろしけつたら、読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8972d/>

彼女の秘密

2010年10月8日14時38分発行